



Title	キャンパスの歴史的建築
Author(s)	越野, 武; KOSHINO, Takeshi
Citation	高等教育ジャーナル, 3, 173-181
Issue Date	1998
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.3.173
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29832
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_P173-181.pdf



キャンパスの歴史的建築

越野 武*

北海道大学大学院工学研究科

Historical Sketches of College Buildings in Japan

Takeshi Koshino **

Graduate School of Engineering, Hokkaido University

Abstract I would like to make certain historical sketches of college buildings at Hokkaido University with respect to the general development of the university campus plan in Japan.

The campus of Hokkaido University has developed through three principal steps. The Sapporo Agricultural College built in the present downtown area of Sapporo in 1875-81 marks the earliest construction. The second step consisted of the construction around the present day Faculty of Agriculture in 1899-1903. The final step is the great enlargement that has taken place since 1918 when the Hokkaido Imperial University was established.

In the new campus of 1899-1903, the main building was placed at the innermost end of the axis of π -type layout. This layout of the so-called "mall type" has been never found in other universities and high schools in Japan. The layout had a famous precedent, Thomas Jefferson's University of Virginia, Charlottesville, constructed in 1817-26.

With the enlargement of the Hokkaido Imperial University, were founded new faculties of Medicine in 1919, of Engineering in 1924 and of Science in 1930. There was conceived a new axis of the general campus plan, that is the central north-south road around which those newly founded faculty buildings were arranged.

はじめに

近代日本における高等教育機関の施設計画の経緯や、キャンパス計画、建築デザインの展開、あるいはその設計、建設にあたった建築家、営繕組織などの歴史像についてはまだ十分な研究が積み重ねられていない。唯一まとまった研究としてあげられるのが宮本雅明『日本の大学キャンパス成立史』(1989.4.九州大学出版会)で、大正7年(1918)大学令公布以前、主として明治期の国立教育機関については基本的な史的考察が加えられている。ほかに菅野誠、佐藤謙の大著『日本の学校建築』(1983.7.文教ニュース社)があって、高等教育機関についてもいくつかの建築が紹介され、また関連する法令や施設基準などの史料が集録されている。

与えられた主題は日本の大学キャンパス建築の歴史的全体像ということになるが、上記両著とその他いくつかの個別論文報告などによって、満足な論

を展開するのは筆者の能力を超える。かわりに北海道大学のキャンパスを構成してきた建築について簡単な歴史的スケッチを描き、その主要なステップごとに日本におけるキャンパス計画史中の簡単な位置づけを試みたい。

北海道大学キャンパスの歩みを大雑把にながめると、前身である札幌農学校時代を含めて3つほどのステップを踏んできたとみてよい。第1が明治9年(1896)札幌農学校創設期 実質的にはその前年札幌農学校として開校の初期キャンパスで、第2が明治32~36年(1899~1903)の5年計画で建設、移転した農学校後期キャンパス、第3が大正7年(1918)北海道帝国大学設置以降、昭和初期にかけて形成されたキャンパスである。もちろん第2次大戦後、新制大学発足時に文系諸学部が新設されてキャンパスは大きく変化したから、これを第4の段階とすることもできるが、少なくともキャンパス空間の

*) 連絡先 : 060-8628 札幌市北区北13条西8丁目 北海道大学大学院工学研究科

**) Correspondence: Graduate School of Engineering, Hokkaido University, Sapporo 060-8628, JAPAN

基本的な構造はあまり変わっていない。小論では第3までの各ステップを追ってみていくことにしよう。

1. 札幌農学校初期キャンパス

札幌農学校創設時のキャンパスは、よく知られているように現札幌市中央区北1,2条西1,2丁目にあった。ただし4街区のうち東側創成川沿いが欠けて、南北120間、東西112間余、地積にして13,490坪(約4.5ha)であった。これに北隣り北3条西1丁目の1街区が加わり、一時植物園とされ、のち教師館敷地に転用された。このキャンパスには旧演武場(明治11年)が遺存し、ただし当初の位置は100メートルほど北側、北2条街路上、国の重要文化財に指定されている。

キャンパスの正面は西向きで、現在の西3丁目街路に面して北から北講堂(明治6年)、書庫(同9年)、演武場、校舎=寄宿舎(同8年)が並び、化学講堂(同10年)だけが寄宿舎の東背後に配置された。

このキャンパスが開設されたのは明治8年(1875)札幌学校として開校した時で、上記のうち北講堂と寄宿舎だけが準備されていた。北講堂は開拓使の外

国人顧問宿舎のひとつとして建てられた「洋造式邸」(ほかに「外国教師五人住居」「ケプロン館」とも呼ばれた)を改装して校舎に転用したものである。1階が3室の予科のための講堂、2階に講堂、製図室、理学・機械学の各器械室が設けられたようである。その旧名称で想像できるようにもうひとつ「洋造式邸」があって、位置は北4条西2丁目、開拓使本庁の東正面から延びる中心軸、軸上の中央街路は1街区分の幅員をもつ広路として構想されたの南北に対称形に配置され、西向きに本庁と正対していた。農学校が西正面とされたのはこれを踏襲したまでである。

寄宿舎は開校に合わせて新築された。前面が寄宿舎棟で当初は平屋、3年後に2階を増築して20室あるいは24室の寄宿室(各室15尺平方、約20)が設けられた。草創期の札幌であるから当然全寮制の計画だったはずで、官費生定員50名からすれば、1室あたり2,3人が想定されたものと思われる。東側別棟に会食所があり、その2階が復習講堂にあてられた。

明治11年に演武場がキャンパス中央に新築されて、主な校舎の建設は完了した。農学校としては当初、煉瓦造2階建てで、集会室、展覽場、博物場、講義室か

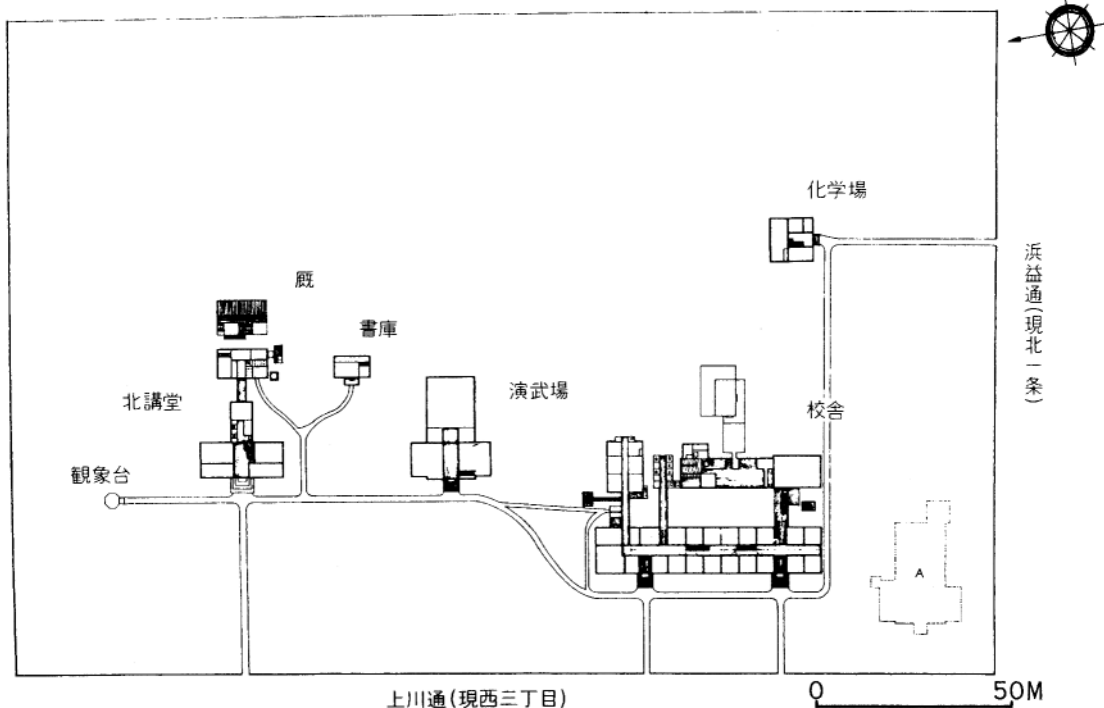


図1 札幌農学校初期キャンパス

らなり、時計台を備えた「農学本館」と、木造平屋の「練兵館」の2棟を建てる構想であった。この計画案は裁可されず、結局両者を合わせて今見るような木造2階建ての演武場「時計台」になったものである。2階の大ホールは練兵館(演武場)と「臨時諸般ノ衆覧、祝賀、成業式、夜宴並ニ演説等」の集会室を兼ねることになった。

各校舎の建築について簡単にふれておこう。初期の洋造式邸=北講堂は、寄棟屋根の軒四周に蛇腹をまわし、開口部に三角、楕形ペディメントを飾った古典主義的な様式につくられた。これに対し演武場は、バルーンフレーム構造が用いられ、外観も大きく切妻屋根をあらわした、軽快で簡素なデザインで建てられた。前者も18、19世紀アメリカに盛行したスタイルであるが、後者のバルーンフレーム構造は19世紀後半、つまり同時代のアメリカ中西部で急速に普及した新式の軽量木骨造である。演武場の計画には農学校のアメリカ人教師 W. Wheeler が、当初の「農学本館」からかかわっており、演武場の平面図と簡単な建築仕様書を作成提出している。演武場に先立つ農場の模範家畜房(明治10年)も、Wheeler の「米国風ノ屋架ノ切組建絵図(an isometric drawing of the frame in American style)」によって建てられており、バルーンフレーム構造がWheeler らによってもたらされた新構法であったことがわかる。

札幌農学校には上記のキャンパスのほか、「農場」「農校園」と植物園・博物館が付設されていた。

農校園は明治9年札幌農学校開校直後に、開拓使官業課属地304,500坪を移管して開設され、15年開拓使廃止時まで1,465,000坪余(約483ha)に増加していた。現在の北大キャンパス地を含むが、それよりは2倍以上のかなり広い範囲を占めていた。例えば現キャンパス東辺より東側の一帯が市街地に繰りこまれるのは、明治28年札幌尋常中学校がその一画北10条西4丁目に新築された前後からである。

農校園には現在の南門から入って正面に派出所(農場事務所)があり、その北側一帯に各種の農場施設が配置された。うち模範家畜房(とその建増)と穀物庫は明治42~43年現在地へ移築、第2農場とされ、今は国重要文化財として保存されている。

植物園は上にふれたように最初北3条西1丁目に開設されたが、明治17年北海道事業管理局札幌農事事務所所管の札幌博物館(明治15年新築。国重要文化財)が属地13,800坪(約4.6ha)とともに札幌農学

校に移管されたものである(越野, 1982)。

札幌農学校が創設された明治10年前後は日本全体でも高等教育施設の草創期にあたり、のち東京帝国大学に統合される一橋開成学校、神田-本郷医学校、駒場農学校などの前身学校が創設された時代である。明治10年に開成学校と医学校が統合されて東京大学法文理各科大学(学部)および医科大学となり、18年までに前者が本郷へ移転、初めて総合大学としての本郷キャンパスが成立している。さらに21年には虎ノ門旧工部大学校=工科大学が本郷キャンパスに加わった(菅野ら1983)。J. コンドルの東京大学法文科大学は別格として、これらの建築の多くは工部省営繕の手になる木骨漆喰仕上げ、隅石付き外壁の素朴な洋風建築であった。明治9年竣工の東京医学校本館が小石川植物園に移築されて遺存している。札幌農学校の建築もこれに対応するが、開拓使によるアメリカ風の木造下見板張り建築であったのが特色である。

2. 札幌農学校後期キャンパス

明治31年(1898)10月、札幌農学校商議委員会は校舎移転を議決、校舎新営の予算も同年12月衆議院を通過した。高等教育機関として新しい展開をはかるには旧キャンパスが狭隘なことと合わせて、発展著しい都心部にあって市街化の要請下に移転が決められたのである。

校舎移転の論議はかなり前から行なわれ、新キャンパス地としては博物館、つまり植物園地が候補にされたこともあるが、結局付属農場の一画、現在の農学部位置が選ばれた。正門は尋常中学校を含む新市街地に面した東向きとされた。新キャンパスのレイアウトが東西軸とされたのはそのためであろう。校舎群の位置が正門から数100メートルも西へ奥まった所に離れたのは、現在の中央ローンを流れるシャクシコト二川の低湿地を避けたからと推定できる。農場は広大ではあるが微地形を考えると、広燥な土地でまとまった広さを確保できる所は案外に少ないのである。この場所はかつて開拓使育種場の一部で競馬場がつくられていたところである。

新営工事総予算は258,000円、5か年継続工事で、明治32年6月13日に起工式が行なわれた。

5か年工事の日程は順調に進み、予算もほぼ当初計画通り、明治36年7月にほぼ工事を了えて移転し

た。38棟にのぼる新築建物のうち主要なものを工事年度ごとに示しておく。

第2年度(明治33.8. ~ 34.6.) 農学教室

第3年度(34.5. ~ 34.12.) 動植物学教室, 農業経済学
及森林学(農政学)教室, 昆虫学及養蚕学教室

第4年度(35.7. ~ 35.12.) 理化学及地質学(農芸化学)
教室, 図書館

第5年度(36.6. ~ 36.12.) 寄宿舍, 暖房機関室, 雨天
体操場

さらに明治40年に札幌農学校が東北帝国大学農科大学に改組された後, 翌41年に予科及実科教室, 42年に林学科教室, 畜産学教室が加わった。

ところで明治32年6月14日付け『北海道毎日新聞』に前日の起工式の記事が見え, 当日の縄張り説明図が掲載されている。東西軸の「五間巾道路」があり, その西最奥に「農学教室」, 南北両側に各教室を配置するキャンパス・レイアウトの基本は, 当然ながら既に確定していたことがわかるが, 北側校舎が東から農芸化学, 昆虫学教室, 南側が同じく動物学植物学, 農業経済学教室の配置で, 実施プランと逆になっていた。また「大講堂図書館寄宿舍等の諸建物は皆此処より北東の方に建築せらるゝ予定」であった。起工式時点で確定していたのは農学本館の位置だけで, その後実施設計を進めながら変更調整を重ね, 配置や建築デザインを確定していったのであろう。

このプランは, 後述のように日本(の国立大学)では大変ユニークなものであるが, 明治32年6月起工式時点で基本的に確定していたことに注意しておきたい。配置の実施設計や主要建築のデザインが, 文部技師・建築家中條精一郎(1868 ~ 1936)の手になったことはよく知られている。『札幌農学校』(第3版。明治35年)所収の新キャンパス鳥瞰透視図「札幌農学校改築教室予定図」や, 遺存する建築設計図のうち少なくとも農学本館の分は中條自筆と推定されている。しかし中條は文部技師とはいえず, 明治31年に東京帝国大学建築学科を卒業したばかりであり, 札幌農学校内出張所へ出張を命ぜられたのが起工式翌月の32年7月であった。配置計画が東京本省に在勤中の中條らによって決められた可能性も否定はできないが, それよりも札幌農学校側の構想であったと考える方が自然ではないだろうか。中條はその基本計画を踏まえて, 配置の細部を決め, 建築表現を組立っていったのであろう。ただ実現した配置計画のうち, 当初はなかった南北副軸の設定は中條の発想としてよ

い。

札幌農学校後期キャンパスの校舎のうち, 図書館と昆虫学及養蚕学教室が原位置に遺存し, また昭和10年以降建てかえられた農学部本館も, 農学本館と左右の農芸化学, 動植物学教室の各原位置を踏襲しているから, もとの校舎群に囲まれた前庭というキャンパス空間の基本骨格はほぼそのまま継承されている。中條の「教室予定図」や配置図に示したように, 東西を主軸とし, これに図書館・大講堂の南北副軸を直交させている。最奥の農学教室本館には主軸焦点を強調して, 中央屋上に八角ドーム, ランタン付きの時計塔が建ちあげられた。中央および両翼を張りだし, それぞれ妻面に三角ペディメントを飾った, 木骨白漆喰壁の古典主義的建築である。以下南北の校舎群もこれにならったデザインであるが, 東側からアプローチするとき, 一番手前の昆虫学教室・農業経済学教室の最も簡略なデザインから順次デザインのポテンシャルをあげて本館にいたるという組み立てである。副軸上の図書館・大講堂の対はこれらとは違い, 特に大講堂だけは他と違う, 双塔を建てたゴシック様式にデザインされた。ただ残念ながら大講堂は実現せず, 同じ位置に少し遅れて水産学教室が建てられることになる(越野1982)。

明治19年帝国大学令, 続いて師範学校, 中学校, 小学校各令が成立し, 各レベルでの教育機関の整備が本格的に進められるようになった。20年代前半には各地の高等中学校が設立建設されていった。頂点の東京大学に次ぐ中等教育施設であるが, 後々各地の大学に発展していくもので, 全国的な高等教育システムの整備ととらえるべきものである。これに対応して文部省の営繕組織もこの頃に初めて独立の体制を整えるようになり, 明治20年には山口半六(1858 ~ 1900), 久留正道(1855 ~ 1914)の2人が相次いで文部技師に就任して, この期のキャンパス建設にあたった。

この期に建設された高等中学校を着工順にあげると, 一高(東京。明治20 ~ 23年), 三高(京都。同20 ~ 22年), 五高(熊本。同21 ~ 23年), 二高(仙台。同21 ~ 24年), 四高(金沢。同22 ~ 26年)の5校である。これらのキャンパス・プランに共通するのは, 正門を入れてすぐの正面中央に(熊本は広い前庭=植物園を経るが, 校舎地には中門が設けられた)本館が置かれていることで, 街路表に向けた左右対称の構えはアカデミズムの権威を誇示するものであった

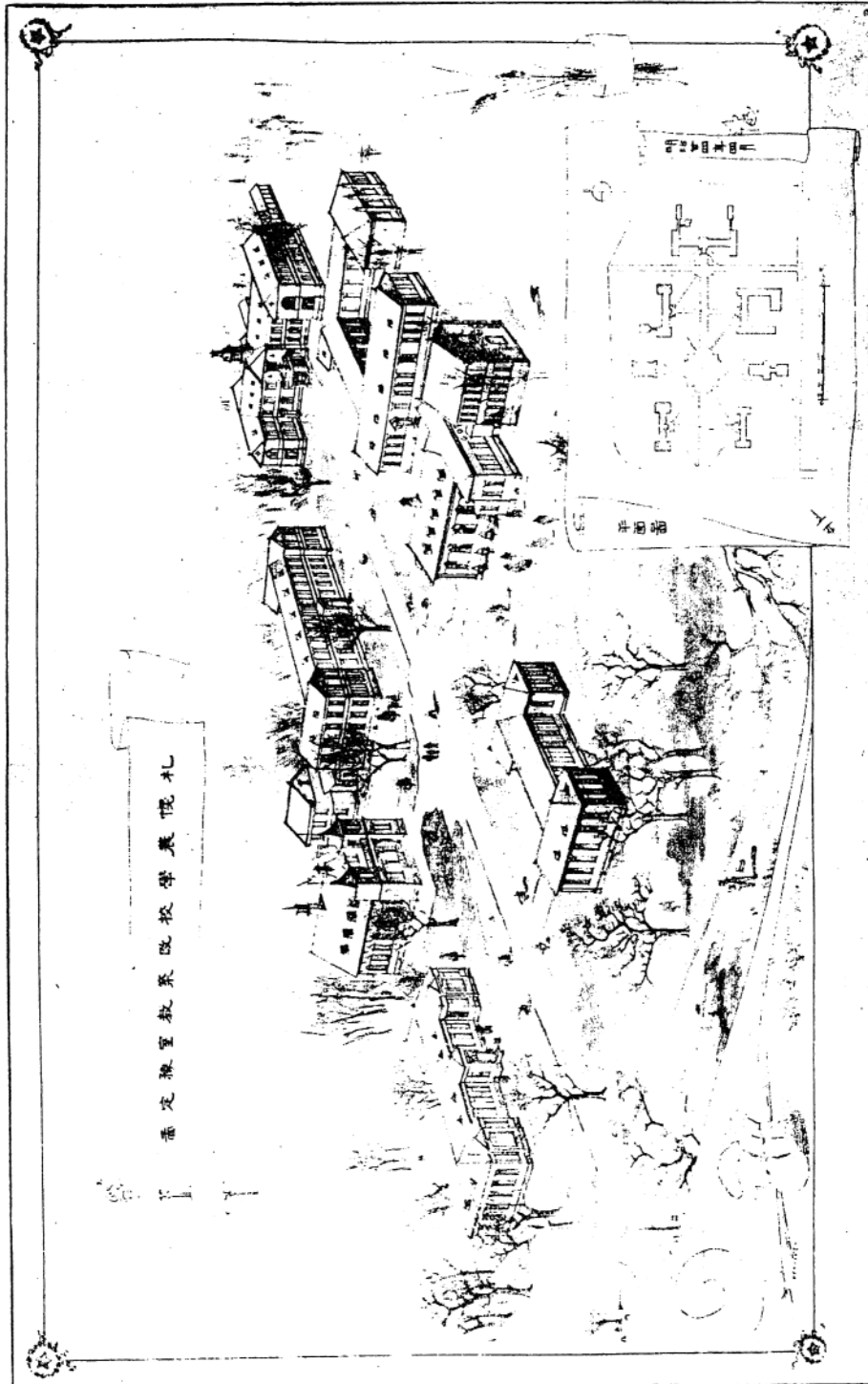


图3 札幌農学校改築教室予定図(『増補第三版 札幌農学校』札幌農学校学校芸会蔵版)

(高本 1989)。手本となるべき欧米のキャンパスが、基本的にヨーロッパ風の都市型か、アメリカに多い広い敷地に奥深い配置をもつ郊外型かのいずれかであるのに対し、これとは違う独特のキャンパス配置で、日本の近世都市の武家屋敷の構えを踏襲する型ではないかと指摘されている。

札幌農学校後期キャンパスの建設は、20年代のナンバー・スクール整備に引き続くものであるが、キャンパスの空間構成はこれらとまったく系統を異にしている。芝生前庭の最奥に焦点となる主建築を置く農学校の型校舎配置プランは、「モール(mall)」型キャンパスと呼んでよいと思うが、そのルーツは著名な University of Virginia (1817 ~ 26) に求めることができる(土肥 1993)。アメリカ合衆国第3代大統領であり、建築家として知られた Thomas Jefferson (1743 ~ 1826) の理想を実現したキャンパス・プランで、中心軸を広々とした芝生空間とし、両側に列柱歩廊で結んだ10棟の校舎=寄宿舍を配し、最奥の焦点にドームをかけた図書館を置いている。上にアメリカに多い郊外型と記したが、ヨーロッパの伝統的な大学と異なる新しいタイプであって、キャンパス・プランの成立にとって University of Virginia は出発点であったといつてもよいものである。日本ではこの時期までほとんど例がなく、札幌農学校を除けば国立大学では昭和6年の東京商科大学(現一ツ橋大学)がこれに近い。むしろ私立のミッション・スクールに例があって、東京立教大学(大正3年。Murphy & Dana)や関西学院上ヶ原キャンパス(昭和3年。ヴォーリズ建築事務所)がよく知られている(山形 1993)。どちらも大学創設の背景、建築家ともアメリカ系のキャンパスである。このように札幌農学校の後期キャンパスは、文部省系の構想にはなかつたもので、創設以来アメリカとの繋がりの強い農学校の伝統を継承し、農学校の教授陣のなかで発想されたものではないかと想像するのである。

3. 帝國大学設置以降拡張期のキャンパス

札幌農学校は明治40年(1907)6月東北帝國大学農科大学に昇格改組していたが、大正7年(1918)4月に独立、北海道帝國大学として総合大学への拡充が開始された。同年12月に大学令、高等学校令が公布され、以降全国の官公私立にわたる高等教育機関の拡張、整備が進められるが、その一環をなすもので

あった。

最初に新設されたのが医学部で大正8年4月、続いて工学部が13年9月、理学部はやや遅れて昭和5年4月に設置され、理系総合大学としての陣容を整えた。それぞれの建築施設新営工事が学部設置に前後しておこされたが、こうした大規模な建築工事に対処するため大正7年北海道帝國大学建築事務所が設置され、同11年営繕課に改組されている。

主要な建築の竣工年を摘記しておく。

医学部：基礎科 大正9～11年。本館は大正12年
付属医院 大正9～昭和4年。本館は大正12年

工学部：本館 大正12年。大実験室 14年

理学部：本館 昭和4年

これらに続いて農学部本館の建替え工事が始まり、中央部分が昭和10年に竣工、以降大戦後まで継続して行なわれた。

こうした大規模な学部施設が加わっていくには、当然それまでの単科大学のレベルを超えたキャンパス・コンセプトが求められる。その基本となったのがキャンパスの中枢を南北に貫く中心軸=中央道の設定であった。主軸に沿って複数の学部クラスターを配置するプラン・タイプは、大規模な総合大学のキャンパス・プランでしばしばみられるものであるが、北海道大学の場合、どの時点でこのキャンパス主軸のコンセプトが意識されたか、必ずしもはっきりしない。

明治30年代の農学校後期キャンパスでは、従来からあった彎曲した農場道路を直通道路に直して第1農場(現理学部北側)に連絡し、この道路に面して現在の文系校舎群位置に寄宿舍が建てられた。さらに明治末には旧農場施設を移転、設置された第2農場まで延長された。この時点ではキャンパス軸の意味は薄かったが、ただ中央講堂の位置設定をめぐって将来の主軸コンセプトの萌芽がうかがわれる。

先にふれたように中條精一郎の原案では、南北副軸上に図書館と対になった大講堂が予定されていたが、これは実現せず、その位置には明治39年水産学教室が建てられた。大講堂の位置は別に予定されたはずで、あるいは中央道南端が想定されたのではないかと推定されるのである。翌明治40年には農科大学に昇格するが、将来の独立総合大学への発展は既に視野に入っていたはずで、この前後に少しずつ南北主軸の構想が生まれていったのではないだろうか。

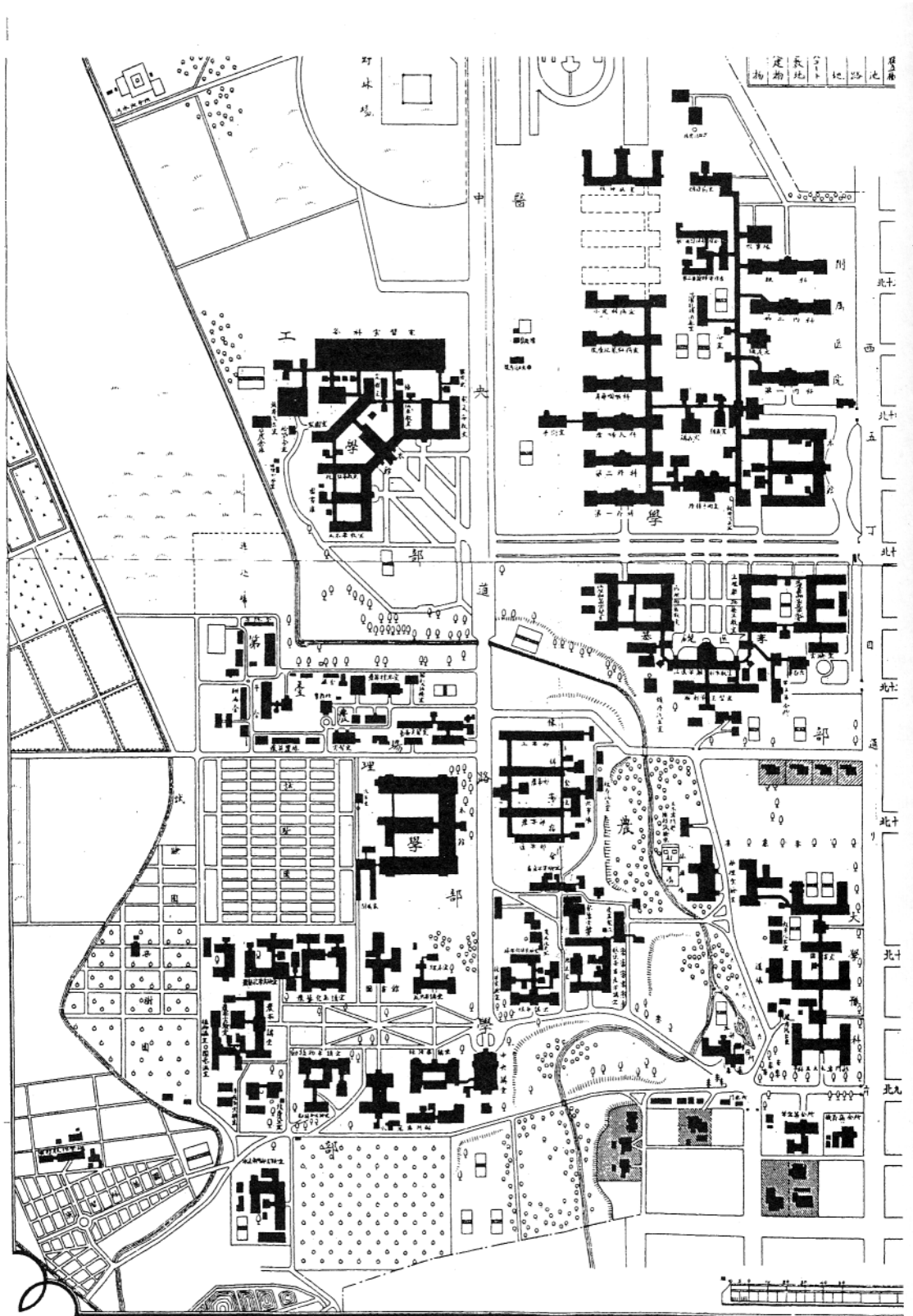


図4 北海道帝國大学平面図(『北海道帝國大学』1929.1.)

このコンセプトが確立するのは大正5年, 中央道に軸を合わせて中央講堂が実現した時であろう。

中央道には医, 工学部をつなぐ北13条東西道が接続された。このキャンパス副道は医学部のプランと密接に関連する。

医学部はこの13条道をはさんで基礎科校舎群が南側に, 付属病院が(現在と同じ)北側に相対して配置された。建築としてみた医学部全体の配置構想には, やや錯雑なところがあって, 基礎科と病院を結び南北の主軸があり, 建築各棟も南正面に向きを揃えている一方で, 両者の本館だけが東正面, 西5丁目街路に面している。ともあれこの南北主軸と交差して13条道が通されているわけで, 現状がそうであるような多くの交通量を考えるなら, 医学部全体のまとまりを分断する, 明らかに矛盾した構想といわねばならない。当初は工学部への連絡は考えられていなかったか, ごく副次的な遊歩道のようなものとされていたのであろう。

数年遅れて設計された工学部のプランは, 中央道, 13条道両軸の交点を強く意識して決められたものである。現在も遺されているように交点から45度対角線方向にアプローチ道が延ばされ, この対角線軸に対称に鶴翼の優雅な姿が実現した。

この拡張期に建てられた各学部の建築は, それぞれ個性的な表情をもっている。医学部基礎科校舎は, 木造下見板に装飾帯板を張ったスティック・スタイル, 付属病院は木骨造擬石の外壁にマンサード・ルーフまたはフレアド・ルーフをかけた建築で, デザインにはジャーマン・セセッションの影響が指摘されている。医学部の建設は長い工期にわたったので, 昭和初期には鉄筋コンクリート造建築が加わり, 斬新なインターナショナル・スタイルまで登場している(江下ら1996)。

工学部は木骨造純白のタイル張り外壁, 急勾配の屋根のところどころ小尖塔を飾ったピクチュアレスなデザインで建てられた。

これらに対し昭和4年竣工の理学部本館以降は鉄筋コンクリート造建築の時代になる。理学部の建築は茶褐色のスクラッチ・タイルの外壁, 小振りの円アーチ窓, 壁を分節するバットレス, 軒を飾るロンバルディア帯と, ロマネスク・スタイルにデザインされた。玄関車寄せ開口の尖頭アーチや, 内部階段ホール3階の「アインシュタイン・ドーム」=リブ・ヴォルトとゴシックが混在しており, 全体としてヨーロッ

パ「中世復興式(revival)」というのが当たっている。

キャンパス建築の様式は, 古典主義を含めて多様なひろがりを見せたのであるが, 特にゴシック・リヴァイヴァルは, 中世に淵源をもつヨーロッパの大学のイメージを表現するもので, 20世紀初頭まで盛んに愛用された。しばしば「キャンパス・ゴシック」といわれたりする。特に大正末から昭和初期にかけては, 関東大震災後の東京帝国大学復興キャンパスの建築(内田祥三, 岸田日出刀設計)が, このスタイルを代表し, また強い影響力をもった。

農学部新本館もスクラッチ・タイル外壁や垂直性を強調した中央塔からすれば, この「キャンパス・ゴシック」の範疇に入れてよいであろうが, 無飾の矩形に揃えられた一般窓はモダニズム・デザインに近く, 一方, 中央塔の時計付き大開口や両脇の副扉口まわりの装飾にはスパニッシュな趣が感じられて, 独自の表現をもった建築になっている。理学部, 農学部は, この間北海道大学営繕課長を勤めた萩原惇正(1892~?)の設計とされている。

参考文献

- 江下友三枝, 越野他(1996)『北海道帝国大学創立期の医学部および同附属病院の建築について』日本建築学会北海道支部研究報告集 No.69
- 江下友三枝, 越野他(1996)『大正・昭和初期における北海道帝国大学の営繕組織について』日本建築学会大会学術講演校外集
- 北海道大学編著(1982)『北大百年史 通説』(越野武「札幌農学校の建築」は, 第2期の後期農学校キャンパスまでについて論考している。)
- 菅野誠, 佐藤譲の大著(1983)『日本の学校建築』文教ニュース社
- 宮本雅明(1989)『日本の大学キャンパス成立史』九州大学出版会
- 日本建築学会(1993)『建築計画部門研究懇談会資料 キャンパス外部空間論』(土肥博至「ヨーロッパ, アメリカのキャンパス空間の構成」, 山形政昭「ミッション・スクールのキャンパスにみる伝統と特色」など)
- Wilson, R. G. ed., (1993), "Thomas Jefferson's Academical Village The Creation of an Architectural Masterpiece." University Press of Virginia, Charlottesville & London